

太田出著

『關羽と靈異傳説——清朝期のユーラシア世界と帝國版圖』

朝 山 明 彦

本書の著者である太田出氏に、評者である私がかつて一度お目にかかったことがある。氏が「關帝廟という裝置―關聖帝君の顯靈との關わりを中心に」（東アジア恠異學會編『恠異學の技法』、臨川書店、二〇〇三年に所收、本書の第三章の初出）という論考を上梓され、そのことについて、の談話會であつたと記憶している。その時、氏は「清朝の史料は分量が多いので、とにかくどんな史料でも片っ端からの読み込みをしなければならぬ。俗に言うペンペン草も生えないように」と仰り、時代は違えども史料の量が多くなる明代の關羽信仰研究を志す私にと

つての金言となつた。それから、氏の御研究は共著『中國農村の信仰と生活』（汲古書院、二〇〇八年）など一連の民間踏査の記録や單著『中國近世の罪と罰』（名古屋大學出版會、二〇一五年）のよう、に社會史に踏み込まれる中、滿を持して刊行されたのが、本書である。本書には、城山陽宣氏（『週刊讀書人』二〇一九年十二月六日號（通號三三二八號））と殷晴氏（『中國研究月報』七四卷九號、二〇二〇年九月）による書評がすでにあり、あわせてご覧いただきたい。評者は著者と同じく關羽研究を志しているため、その立場からへい、本書の内容へ2、現在に

於ける研究意義へ3)本書から見えてくる關羽信仰の研究展望に分けて、本書を紹介したい。

へ1) 本書の内容

序章では、現代の關羽信仰の情報から入り、關羽信仰を含めた中國近世の民間信仰を位置づけ、そして著者の専門とする清朝の統治構造と王權との關わりについて述べる。

續く第一章では、「唐朝から明朝における關羽の神格化」を語る。關羽の死後の物語から、歴代王朝による敕封、唐代・宋代・元代の關羽信仰をまとめ、最後は「明朝における關羽の靈異傳説」として、明朝末期の國難の中、朝鮮半島に、東南沿海に、そして華南西南地域にと各地に顯聖した關羽の靈異傳説を擧げていく。

第二章では、「清朝と關聖帝君の「顯聖」として、具體的事例を出しながら、關聖帝君の靈異傳説を分析する。著者が關羽の顯聖として想定するのは、「中國内地における千年王國運動的宗教活動」と「十全武功をはじめとする大軍事遠征」の二つの場面であり、本章では前者に

注目する(後者は第五章・第六章)。本章での關羽の顯聖とは、「單に關羽の忠義・武勇を強調するのではなく」「清朝皇帝から一般民衆までの心性に踏み込んだ、關聖帝君の加護のもとにあるという「われわれ」意識」という紐帯ができあがったことを指している。すなわち、關羽を通じて、官民上下を問わない、共有すべき意識の形成が可能になったという主張である。

第三章では、現代關帝廟の踏査記録を紹介しながら、「記憶・傳承裝置としての關帝廟」と題し、關聖帝君の顯聖を示し、關帝廟には「民間の「下からの」信仰より」「上からの」權威づけがより重要な意味を持った」と述べる。

第四章では、「白蓮」の記憶に着目する。白蓮教の中で生まれた謠言は人々に恐怖の記憶を年々植え付けていったが、それを打ち破るのが王朝國家を加護している「われわれ」の關聖帝君であることを示している。

そして、第五章・第六章が本書の主眼であり、乾隆帝の版圖擴大によって、「清朝ユーラシア世界統合」が打

ち立てられていく中で、關聖帝君の役割を示す。乾隆帝の十全武功が強調される中で、「關羽信仰を紐帶とする『われわれ』意識を利用した「中外一統」がなされた」と位置づける。

最後に、終章で、「國家と宗教」として、清朝王權と關羽信仰をまとめ、さらに「王權」との關わりで、日本の天皇や徳川將軍、そして朝鮮を含む廣く東アジア世界を見通して、本書を締めくくっている。

へ2 現在に於ける研究意義

本書は、清朝までの關羽信仰にかかる史料を網羅的に収集してその具體的様相を述べた大作である。如何に清朝時代の史料が豊富とはいえ、その中から關羽史料を抽出し、読み込まれた著者の努力には頭が下がる。先に紹介した著者の言葉の通り、史料を漏らすことのない、まさしく「片っ端からの読み込み」が結實したものであると言える。

その上で、關羽信仰に於ける本書の研究意義は、まず第一に清王朝の關羽信仰の實情を、壓倒的な量の具體的

史料を引いて明らかにしたことである。著者は關羽信仰研究の先驅者である井上以智爲氏の「關羽祠廟の由來並に變遷(上)(下)」（『史林』二六卷一・二號）と「關羽信仰の普及(一)」（『福岡商大論叢』四卷）を多く引用する。井上氏の論は一九四一年、一九五一年の刊行であり、今日まで七十年、八十年ほどの年月が経つ。その論が太田氏に多く引用されるのは、關羽信仰の研究がなかなか進まず、また廣範圍であるため研究すべき事象が數多く残っていることを物語っている。その間にもちろん多くの研究者により、井上氏以來の關羽信仰の總論、或いは個別關心による關羽信仰の各論は説かれてきた。ところが、諸先學に於いても武神關羽のあり方と王朝の關羽信仰のあり方を正面から述べたものは意外にも少ないと言える。本書は諸先學の成果を統括し、かつ清王朝の關羽信仰の實情を新たに示し得ている。本來の關羽信仰の「武」の側面を着實に描き出したと言えるであろう。

第二には、關羽信仰を獨創的な發想で表現した點で、本書のキーワードとして「靈異傳説」「われわれ」の關

「聖帝君」「王權」を擧げることができる。一つ目の「靈異傳説」は、關羽信仰研究の定番であるが、從來の研究では文集・雜記・碑記や地方志に依據するものが多かった。著者は清朝時代の特性を生かし、それらに加えて檔案にまで踏み込み、説得力をより高めている。檔案史料は文集のような前述の史料群より入手が困難で、また讀解も困難である。著者の關羽信仰研究の大きな強みとなっている。

二つ目の「『われわれ』の關聖帝君」という言葉の「われわれ」と二つ目の關羽信仰と「王權」の關係は、著者の獨創的な視點として強調すべきである。前者からは、民間に廣まっている『下からの』關羽信仰に『上からの』お墨付きを與えること、そして官民一體、中外一統とするまとまりに關羽信仰を紐帶としていることがよくわかる。また後者は、表側のいわゆる「陽」としての皇帝を、裏側から關聖帝君が「陰」として支える社會構造を示すが、これは從來の關羽信仰研究の視點では強調されなかった。かつて山田勝芳氏は關羽信仰を讀み解く

中で、その先に「均の理念」があることを提示されたが（『中國のユートピアと「均の理念」』汲古書院、二〇〇一年）、本書は清王朝の關羽信仰の先に「王權」の擴張を讀み解いている。特に第六章で示す「關聖帝君の靈佑を語る靈異傳説」と「關聖帝君の靈力を可視化する關帝廟」のあり方は、まさしく「王權」の擴張による關羽信仰の體現であろう（二九〇頁）。乾隆帝の十全武功は人口に膾炙した話であるが、そこに關羽信仰を絡めて、乾隆期の版圖擴大を描いていく様は非常に讀みごたえがあった。

（3）本書から見えてくる關羽信仰の研究展望

以上、本書を讀了して、今後に求められるであろうことを述べてみたい。本書によって、清朝までの王朝が關羽信仰を如何に扱い、關羽の「武」に如何なるものを期待したかが明らかになった。しかし一方で、關羽信仰に於いては「武」だけにとどまらないものが多く見える。人々の關羽への希求は、祈雨・治水・科擧への登第など人々の慾求に比例して枚擧に暇ないが、それらが王朝が

「武」の關羽を崇拜すること如何に關係してくるのか。本書によつて、各王朝、特に清王朝の關羽信仰の外枠・枠組みが定まってきただけに、その内部に於いて同時期の人々が「武」以外の面で如何に關羽信仰と向き合っていたのかは大きな主題の一つであろう。

特に清王朝の關羽信仰に於いては、前代の明王朝の關羽信仰とのつながりを如何に讀み解いていくべきか。明の嘉靖帝や萬曆帝は道教への信仰が深く、その方面での關羽信仰への關わりも推察できる。一方、清王朝では國家の祀典の中で、關羽を武廟に定め崇めているが、乾隆帝以外の各皇帝の關羽觀なども氣になるところである。少し本書の意圖とは外れるが、同じ關羽信仰の研究として、例えば、臺灣の王見川氏のように關羽を道教など宗教的側面から捉えた研究もあるので、その方面への著者の關羽觀もうかがいたいところである。

また、こうした清王朝の關羽信仰の趨勢を示す中で、歴史的に關羽信仰を牽引してきたのは關羽の聖地であった。關羽の生誕地である山西の解縣、關羽終焉の地であ

る湖北の當陽縣、そして關羽の首塚である河南洛陽の關林などは、その代表である。これらの關羽の聖地が、王朝の關羽信仰と如何なる關係にあったのだろうか。

さらに言えば、著者は終章で、民國から現代、さらには廣く東アジア社會から世界への關羽信仰に目を向けている。今でこそ世界各地のチャイナタウンにはほぼ關帝廟が存在するが、そこに至るには如何なる關羽信仰の傳播と由來があつたのか。

最後に、關羽を研究する者にとつて必ず問われる言葉がある。「何故關羽なのか」「何故關羽が信仰されてきたのか」と。本書は、何故清王朝は武神關羽を祀つたかについて、その問いに明確に答えているが、他の時代や他の地域に於いてその問いに如何に答えていくべきか、今後の研究が期待される。本書の刊行により、讀者の關羽信仰への興味が益々深まることを評者は斷言できる。

なお、四一頁「表1-1 歴代王朝による封號の賜與」で「景耀3年(206)」とあるのは、「景耀3年(260)」の誤植であろう。

(A五判、全三四頁、二〇一九年九月、名古屋大學出版會、

本體五四〇〇圓十税)

寄稿規程

編集委員會

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。

論考 四百字詰四十枚程度

研究ノート 四百字詰二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度

國際學界動向 四百字詰十枚程度

なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添付してください。

○外國語による論文要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員會が校正する場合があります。外國語は原則として英語とし、語

数は三百語程度とします。中國語表記はウェード方式、あるいは拼音(ピンイン)方式でお願いいたします。

○外國語による論文要旨の日本語原文

投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を参照してください。

○本誌に掲載された原稿は、発行より三年経過した後にウェブ上に公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。(詳しくはホームページをご覧ください。)

三、原稿締切は、六月二十日、十二月二十日といたします。

四、内容は未発表のものに限り、採否は、當學會に御一任ください。

五、抜刷を御希望の方は、有償でPDFファイルまたは印刷冊子を作成いたします。

六、特殊製版(圖版・寫真版など)、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先 〒305-8571 茨城縣つくば市天王臺一〇一

筑波大學人文社會科學研究科 歴史・人類學專攻 丸山宏研究室内

日本道教學會事務局

電話 〇一九一八五二一四〇五〇

E-mail: info@taoistic-research.jp